

20001118

平成 12 年度厚生科学研究  
(医療技術評価総合研究事業)

今後の歯科技工士に対する  
養成方策等に関する総合的研究

総 括 研 究 報 告 書

2001 年 3 月

主任研究者

渡 辺 嘉 一 日本歯科大学

総括研究報告書

今後の歯科技工士に対する養成方策等に関する総合的研究

主任研究者 渡辺嘉一 日本歯科大学教授

**研究要旨** 近年、高度・最新の知識および技術を必要とする歯科技工が一般歯科治療の現場に普及しているが、要介護高齢者や障害者に対しての口腔ケア、口腔リハビリテーションの視点からの歯科補綴やエステティックを重視した歯冠修復など従来の歯科技工では想定されていなかった領域にまで広がっている。また、医療専門職養成を取り巻く総体的な流れとしても、医療人としての人間性の涵養や、チーム医療の重視等が求められている。しかし、現在の歯科技工士養成の現場においてはこれらの状況変化への対応はほとんど行われていない。こうした環境変化や社会的要請に対応するために、教育現場の実態調査を行うとともに、臨床現場からの意見を調査し、歯科技工士学校養成所の現場で容易に適応が可能なカリキュラムモデルの作成を行った。カリキュラムモデルの作成は教授要綱の大綱化を行い、単位制を前提として行った。臨床現場の歯科医師、歯科技工士は新卒者に対し知識、技術、社会性・人間性のいずれにも満足は得られていない。また歯科医療の多様化に伴い新しい教育内容が必要であると考えている。さらに、臨床(診療)見学の必要性をも認めている。しかしながら、現行の授業時間数は2582時間とすでに過密教育となっており、その打開のためには、養成年限の延長が不可欠である。

A. 目的

近年、高度・最新の知識および技術を必要とする歯科技工が一般歯科治療の現場に普及しているが、要介護高齢者や障害者に対しての口腔ケア、口腔リハビリテーションの視点からの歯科補綴やエステティックを重視した歯冠修復など従来の歯科技工では想定されていなかった領域にまで広がっている。

また、医療専門職養成を取り巻く総体的な流れとしても、医療人としての人間性の涵養や、チーム医療の重視等が求められている。

しかし、現在の歯科技工士養成の現場においてはこれらの状況変化への対応はほとんど行われていない。

そこで本研究ではこうした環境変化や社会的要請に対応するために、教育現場の実態調査を行うとともに、臨床現場からの意見を調査し、歯科技工士学校養成所の現場で容易に適応が可能なカリキュラムモデルの作成を行うとともに、その実施に資することを目的とした。

B. 研究方法

1) 全国歯科技工士教育協議会特別委員会内のワーキンググループ(7校より構成、以下:全技協)を対象に実施した各科目の学則時間数、実施時間数、理想的時間数についての調査及び同ワーキンググループメンバーである各校教務主任からのヒアリングを行った結果、さらに本研究班独自に選出した歯科技工士学校養成所7校の教務主任からヒアリングを実施した結果を資料とし、検討した。

2) 臨床の現場として、あるいは一部歯科技工士学校養成所の新卒者のユーザーとして、全国の歯科医師415名(有効回答数182名)、歯科技工士300名(有効回答数146名)に対して今後の歯科技工士養成に関する意識調査を実施し、その回答を分析した。

3) 海外の養成プログラム、国内における他の医療専門職種養成プログラムについて文献等を中心に調査検討した。

なお、カリキュラムモデルの検討及び作成に際しては、教育の大綱化と単位制を前提とし、教育内容については、基礎分野、専門基礎分野、専門

分野に分野別化した。さらに専門分野における技工実習については独立させ検討した。

## C. 研究結果

### 1. 現状の学科課程について

#### 1) 学科課程における大綱化

現状の学科課程を基礎分野、専門基礎分野、専門分野、技工実習に分野別すべく、他の医療専門職種などを参考とし検討した結果は以下の通りである。

基礎分野：英語、造形美術概論

専門基礎分野：関係法規、歯科技工学概論、歯の解剖学、歯科理工学、顎口腔機能学、

専門分野：有床義歯技工学、歯冠修復技工学、矯正歯科技工学、小児歯科技工学、

歯科技工実習：歯科技工実習、

#### 2) 現状の実施時間数

全技協ワーキンググループ7校における実施時間数の調査結果は以下のとおりであった。

	指定規則時間	実施時間
基礎分野	45 時間	50.1 時間 (11.3%増)
専門基礎分野	495 時間	625. 時間 (26.4%増)
専門分野	940 時間	1208.7 時間 (28.6%増)
歯科技工実習	520 時間	627.9 時間 (20.8%増)
選択必修	200 時間	0 時間
総時間	2200 時間	2513 時間 (14.2%増)

いずれの分野においても、実施時間は指定規則を大きく上回っていた。(選択必修科目は各養成施設で独自の解釈・基準によって活用し、他科目に振り分けている)

また、ヒアリング参加校いずれにおいても放課後や休日等に補講などを実施していた。

### 2. 臨床現場からの歯科技工士学校養成所の新卒者についての意識

歯科技工士学校養成所新卒者の知識、技術、社会性・人間性について、臨床現場の歯科医師、歯科技工士に対して行ったアンケート調査の結果を図1～6に示す。集計については、満足(+2)、

やや満足(+1)、普通(0)、やや不満(-1)、不満(-2)とし、加重平均値を算定した。

知識、技術、社会性・人間性いずれの質問項目においても歯科医師は「普通」とする回答が「不満」「やや不満」とする回答をわずかに上回り、歯科技工士は「不満」「やや不満」の回答が「普通」とする回答をやや上回った。

加重平均値からみると、歯科医師は知識について-0.35、技術について-0.32、社会性・人間性-0.02 となった。歯科技工士は知識について-0.56、技術について-0.63、社会性・人間性-0.55の値を示した。

#### 1) 不満に思う理由について

知識については歯科医師、歯科技工士とも基礎分野のレベル、専門基礎レベル、専門レベルが50%以上の値を示した。

技術については歯科医師、歯科技工士とも製造・加工のレベル、模型観察のレベルが60%以上の値を示した。

社会性・人間性については、歯科医師が技術者としての向上心のレベル、礼節のレベル、コミュニケーションのレベルで50%以上を示し、歯科技工士は技術者としての向上心のレベル、礼節のレベルが60%以上の値を示した。

また、「新卒の歯科技工士を採用するにあたり、最も重視するものは何か」との質問に対し歯科医師、歯科技工士ともに図7に示すように社会性・人間性を1位に挙げ、以下技術、知識の順とする回答が最も多かった。

### 3. 臨床現場からの今後の歯科技工士養成に関する意識調査

「歯科医療の多様化に伴い、今後歯科技工士に必要となる新分野があると思いますか」との問いに対して、歯科医師の69.8%、歯科技工士の74.7%があると回答している。さらに、新しく加えるべき新分野について図8に示すように歯科医師は歯周病学(48.0%)、インプラント技工学(43.3%)、色彩学・審美歯科技工学(37.8%)に必要性を感じており、歯科技工士は情報処理学(47.7%)、歯科技工士の健康と環境(46.8%)、

歯科技工所の経営・管理学（45.9%）に必要性を意識している。

また、現在の修業年限（2年以上）についての質問に対して、歯科医師の59.3%、歯科技工士の19.2%が現状のままでよいと回答し、歯科医師の34.6%、歯科技工士の73.3%が延長すべきであると回答している。

また、臨床（診療）見学の必要性については歯科医師の89.6%、歯科技工士の93.2%が必要であると回答している。

ヒアリングに参加した歯科技工士学校養成所の教務主任のいずれからも、臨床（診療）見学の必要性はもちろん、実際の臨床物を製作し、自己の製作した技工物が装着される場所を見学する必要性が強調された。

## D. 考 察

### 1. 現状の学科課程及び実施時間数

#### 1) 学科課程の大綱化について

現状の学科課程は12教科に区分されている。このことは、個々の学科目が独立するため、学科目間の相互理解が得にくい結果を招いている。また、他の医療専門職種は、学科目の統廃合を実施し、単位制を導入し、大綱化している。これは、平成7年に公表された「医療関係職種の改善に関する検討会」意見書<sup>1)</sup>において、養成施設の独自性が発揮できるカリキュラム編成に積極的に取り組めるよう、弾力的な運用が進められるべきであるとしたものによるものである。さらに、養成施設間又は大学間での編入の取り組みを促進する必要がある、そのために単位制を導入することなどを提言していることなどによるものである。

歯科技工士の養成においても、現行の学科課程を統廃合し、単位制を導入し、大綱化する必要があると考えられる。そのためには、現状の学科課程を基礎分野、専門基礎分野、専門分野に統廃合する必要があると考えられる。

また、現在ある選択必修科目については、英語、造形美術概論以外から各校が自由に選択することになっているが、大綱化することにより、選択

必修科目の必要性はなくなるものと考えられる。

#### 2) 実施時間数について

調査結果から現状の実施時間数は2513時間であり、指定規則の2200時間を313時間も大きく上回っている。さらに、現実には教育内容を消化するために、放課後や休日にも授業を行っている。渡辺<sup>2)</sup>らの報告によると、全国の歯科技工士学校養成所での平均はワーキンググループのデータをも上回る2582時間である。

「医療関係職種の改善に関する検討会」意見書<sup>1)</sup>においてもゆとりを持ったカリキュラムを編成する必要性を提言している。

①ゆとりあるカリキュラムは概ね1年間で800時間といわれていることからすると、現状の2582時間は3年間分の教育を2年間に押し込められていると考えられる。

②臨床現場からは新分野に対する教育の必要性が示されている。

③他の医療関係職種のほとんどが3年制で養成している。

④今回の調査及び渡辺ら<sup>2)</sup>の報告から

臨床現場の歯科技工士	73.3%
臨床現場の歯科医師	34.6%
歯科医師会長	53.3%
歯科技工士会長	100%
歯科技工士学校養成所	65.3%

が修業年限を延長すべきであると考えている。

特に、歯科技工士の就業先が歯科医院から歯科技工所に大きくシフトしてきている現在、歯科技工士会長や臨床現場の歯科技工士の考え方は重要である。

これらのことから、現状の改善方法は修業年限を延長する以外には考えられない。

#### 2. カリキュラムモデルについて

歯科医療における様々な変化や歯科技工士に対する社会的要請等に対応するための歯科技工士学校養成所におけるカリキュラムモデルを各分野別に検討した。

##### 1) 基礎分野

新卒者に対して不満と思う理由として、知識に

については第一に基礎分野のレベルが挙げられている。臨床現場の歯科技工士は、情報処理学が今後必要となると考えていることが調査結果から認められる。アンケート調査の結果から、新卒の歯科技工士を採用するにあたり、最も重視するのが社会性・人間性であるとの結果もある。

「医療関係職種の改善に関する検討会」意見書<sup>1)</sup>から、教育課程においても、知識・技術のみならず、医療人としての人間性を涵養する教育が推進されることが必要であるとしている。

これらのことから、現行の英語、造形美術概論だけの教育でよいとは考えにくく、現行の45時間から概ね120時間8単位程度とすべきである。

## 2) 専門基礎分野

今後の歯科技工士に必要となる新分野として、臨床現場の歯科技工士からは、「歯科技工士の健康と環境」「歯科技工所の経営・管理学」を挙げている。これらはすでに海外において<sup>3, 4)</sup> 感染防止やラボ経営管理等、独立した学科課程として位置付けている。加えて、品質管理については、他の製造職種のTQCへの取り組みに対する歯科技工分野の立ち遅れは否めず、人工臓器であることを考慮すれば早急な確立と卒前教育が必要であると考えられる。

また、他の医療職種との共通した認識を持ち、「チーム医療」としての認識をもつためにも、この分野の拡充は必要であると考えら、現行の495時間から22単位程度とすべきである。

## 3) 専門分野

今後の歯科技工士に必要と考えられる新分野として、歯科医師は「歯周病学」「インプラント学」「色彩学・審美歯科学」などの専門分野にその必要性を感じている。すなわち歯科医師は、時代のニーズにあった歯科医療を行うにあたり、チーム医療の担い手である歯科技工士にも時代とともに、常に進歩し、その時々マッチした知識・技術を習得することを望んでいることを示している。

このことは、極めて近い将来、現行の教育内容に加えてこれらの新技術について養成施設で教

授することが必要となることを示唆しており、現行の940時間から43単位（歯科技工実習は除く）程度にすべきである。

## 4) 歯科技工実習

現行の教授要綱において、歯科技工実習はその目標を歯科技工に関する知識及び技術を基礎として歯科技工を習得させることを目的としている。その方法は（1）臨床模型上での実習（2）臨床的模型上での実習の2種類である。

①他の医療関係職種の多くが卒前教育を臨床の場で行っていること。

②近年、新卒者の就業先が歯科医院から歯科技工所に大きくシフトしていること。

③臨床現場の歯科医師、歯科技工士の9割以上が、臨床（診療）見学の必要性を認めていること。

これらのことから、今後の歯科技工実習においては、臨床模型による実習、臨床（診療）見学が不可欠であると考えられる。現行の520時間から20単位程度にすべきである。

しかし、この問題については関連省庁及び諸団体の協力が必要である。

歯科技工士の資質向上、国民医療の向上のためとの見地から、十分な理解を得たいと考える。

以上の検討結果から、別表1に示すカリキュラムモデルを作成した。

## E. 結 論

1. 指定規則にある教授要綱は、基礎分野、専門基礎分野、専門分野に大綱化し、これまでの時間数を単位制とすべきである。

2. 臨床現場の歯科医師、歯科技工士は歯科技工士学校養成所の新卒者に対し、知識、技術、人間性・社会性いずれについても満足していない。

3. 臨床現場の歯科医師、歯科技工士は歯科医療の多様化に伴い、新しい教育内容が必要であると考えている。

4. 臨床現場の歯科医師、歯科技工士の9割以上が臨床（診療）見学の必要性を認めている。

5. 現状、養成施設で実施されている授業時間数は2582時間であり、過密教育となっている。

このため歯科技工士の適正教育，資質向上のためには養成年限の延長が不可欠である。

現在 72 校ある歯科技工士学校養成所は、設立母体や所轄官庁がそれぞれ異なるだけでなく、短期大学や専門学校、修業年限 2 年、3 年、昼間制、夜間制と多岐にわたってきている。

今後はこれらの諸条件による差異などについてもさらに調査するとともに、今回提示したカリキュラムモデルの具体的内容について精査する必要がある。

#### F. 研究発表

なし

#### G. 知的所有権の取得状況

該当なし

#### H. 参考文献

- 1) 医療関係職種のエデュケーションなどの改善に関する検討会意見書 - 医療関係職種の質の向上を目指して - , 厚生省健康政策局医事課, 医療関係職種の教育課程などの改善に関する検討会, 1995.
- 2) 歯科技工士の需給及び養成に関する研究, 渡辺嘉一, 平成 11 年度厚生科学研究, 2000.
- 3) 田端恒雄, アメリカにおける歯科技工士教育について, 明倫歯誌 3 (1), 1-4, 2000.
- 4) 田端恒雄, 各国における歯科技工士教育について, 明倫歯誌 2 (1), 1-8, 1999.

図1 現在の歯科技工士養成所新卒者のレベルについて

①知識について

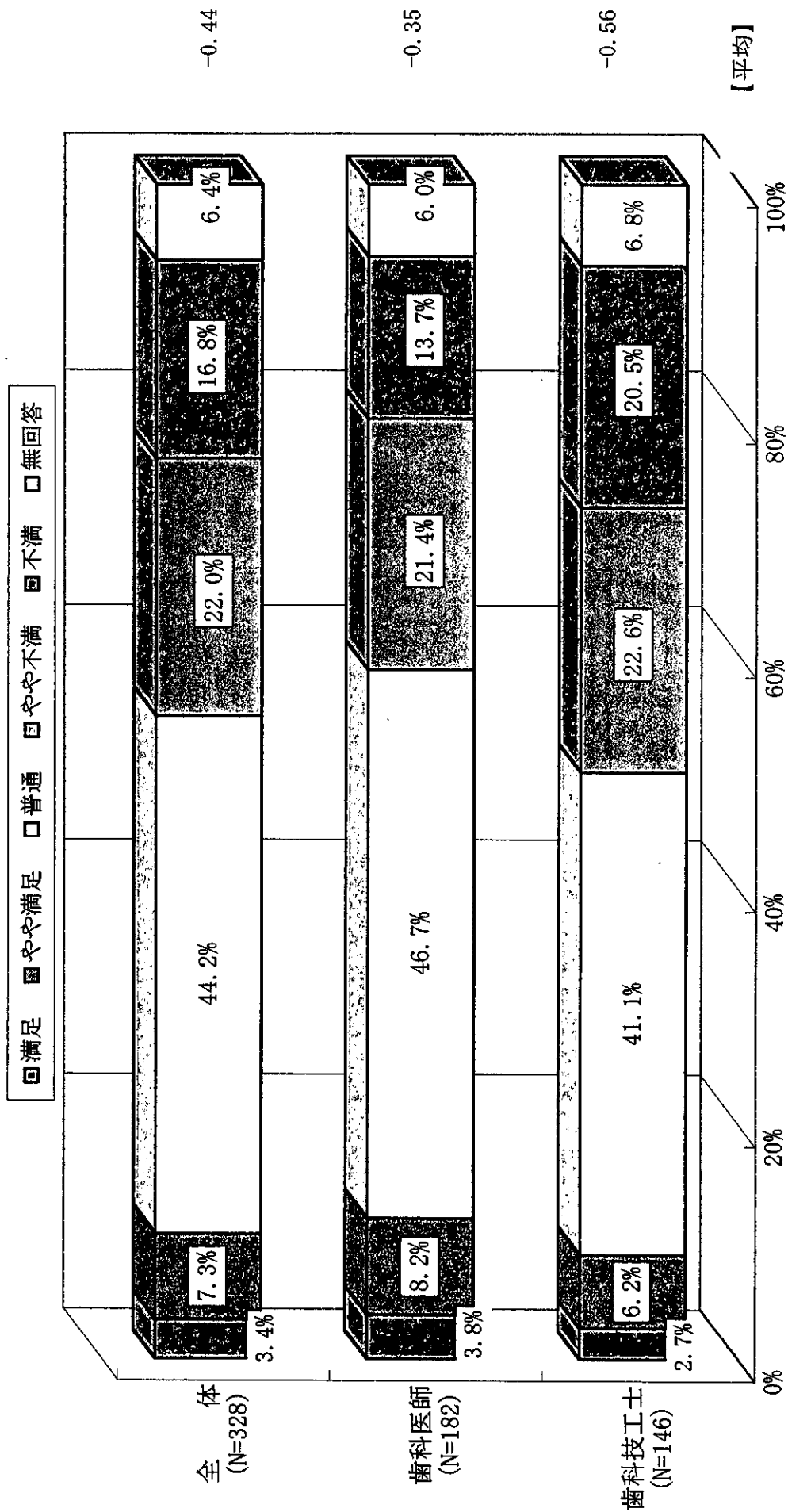


図2 現在の歯科技工士養成所新卒者のレベルについて

②技術について

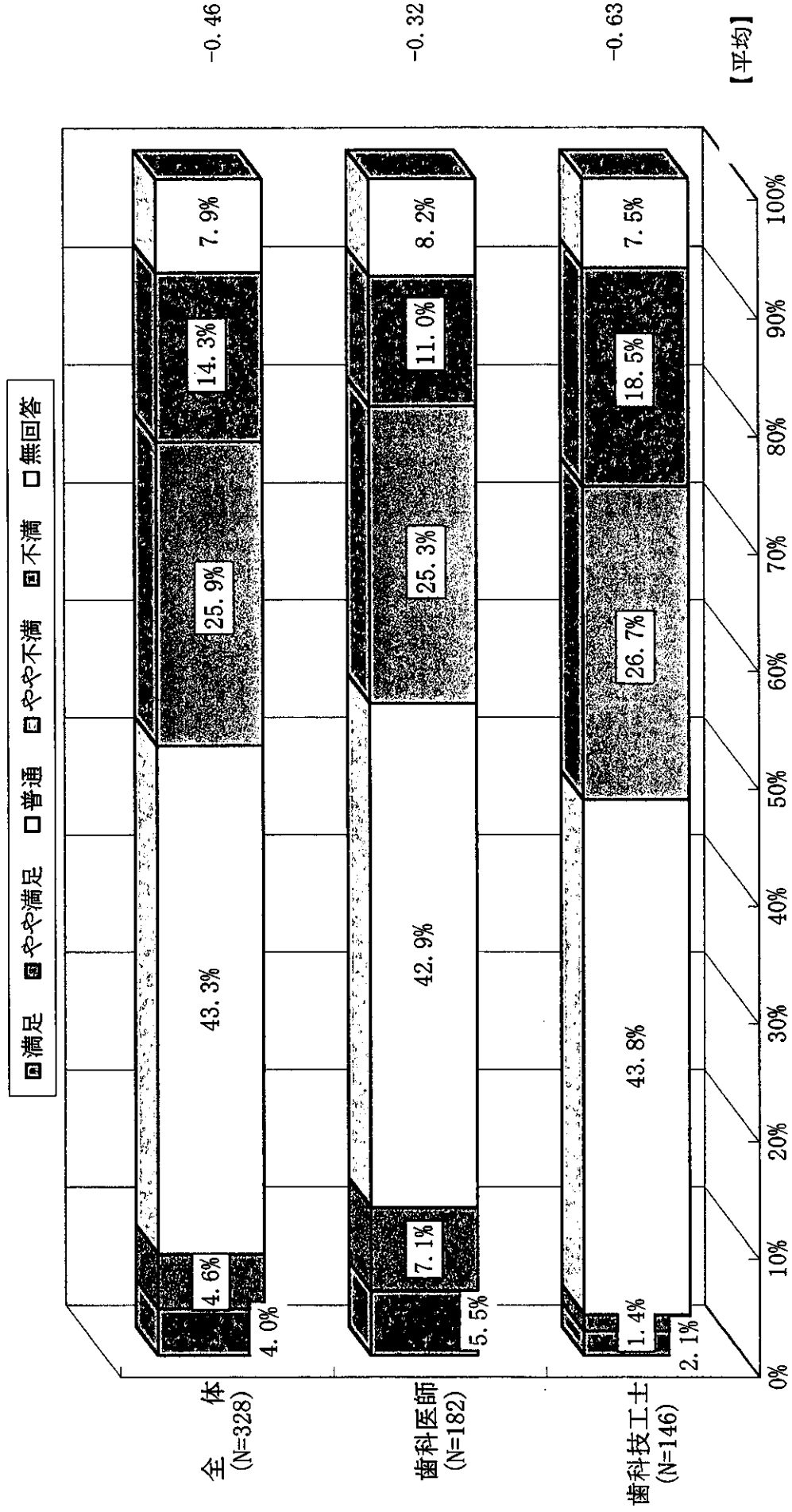




図3 現在の歯科技工士養成所新卒者のレベルについて

③社会性および人間性について

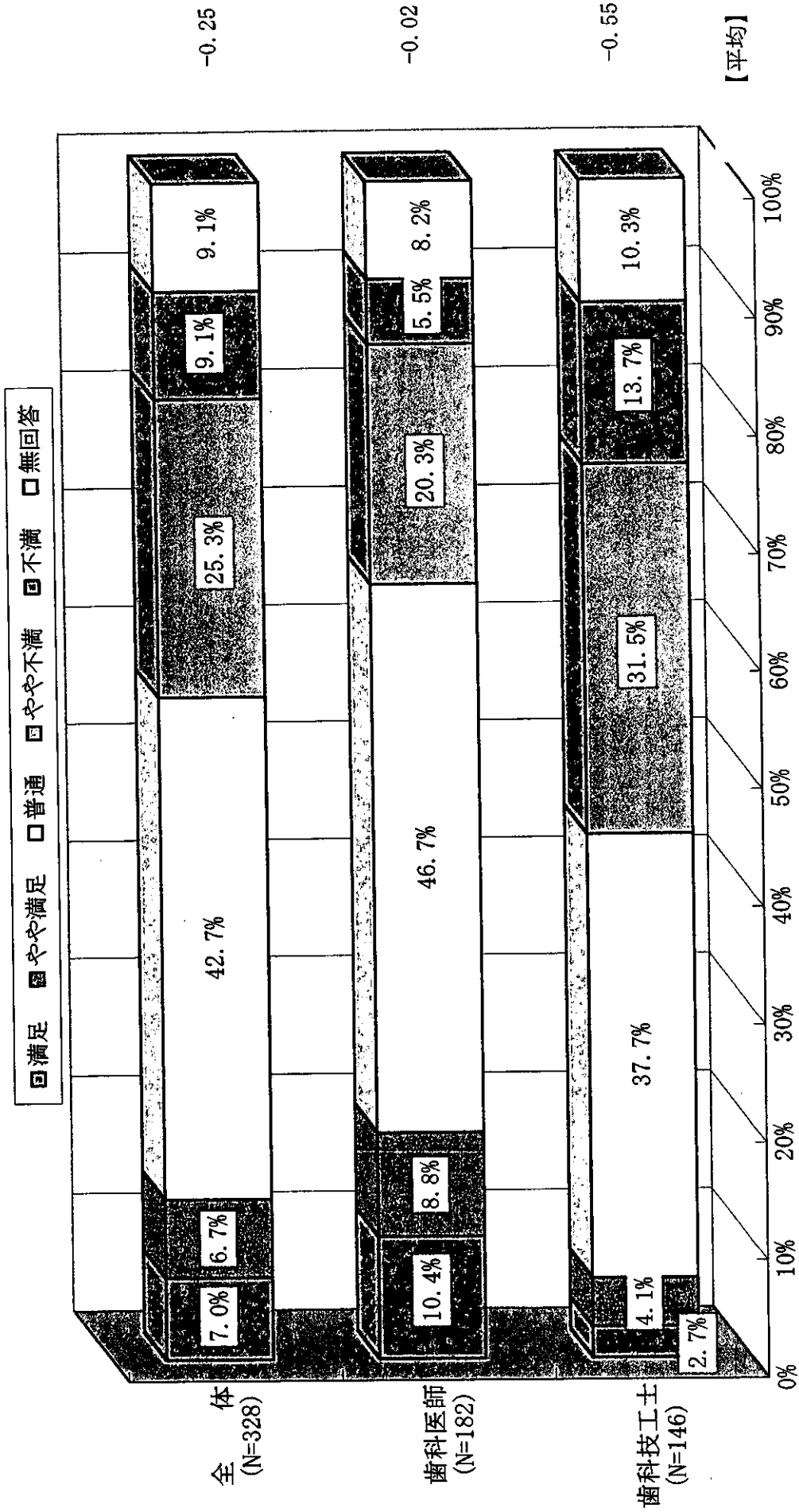


図4 不満と思う理由 (知識)

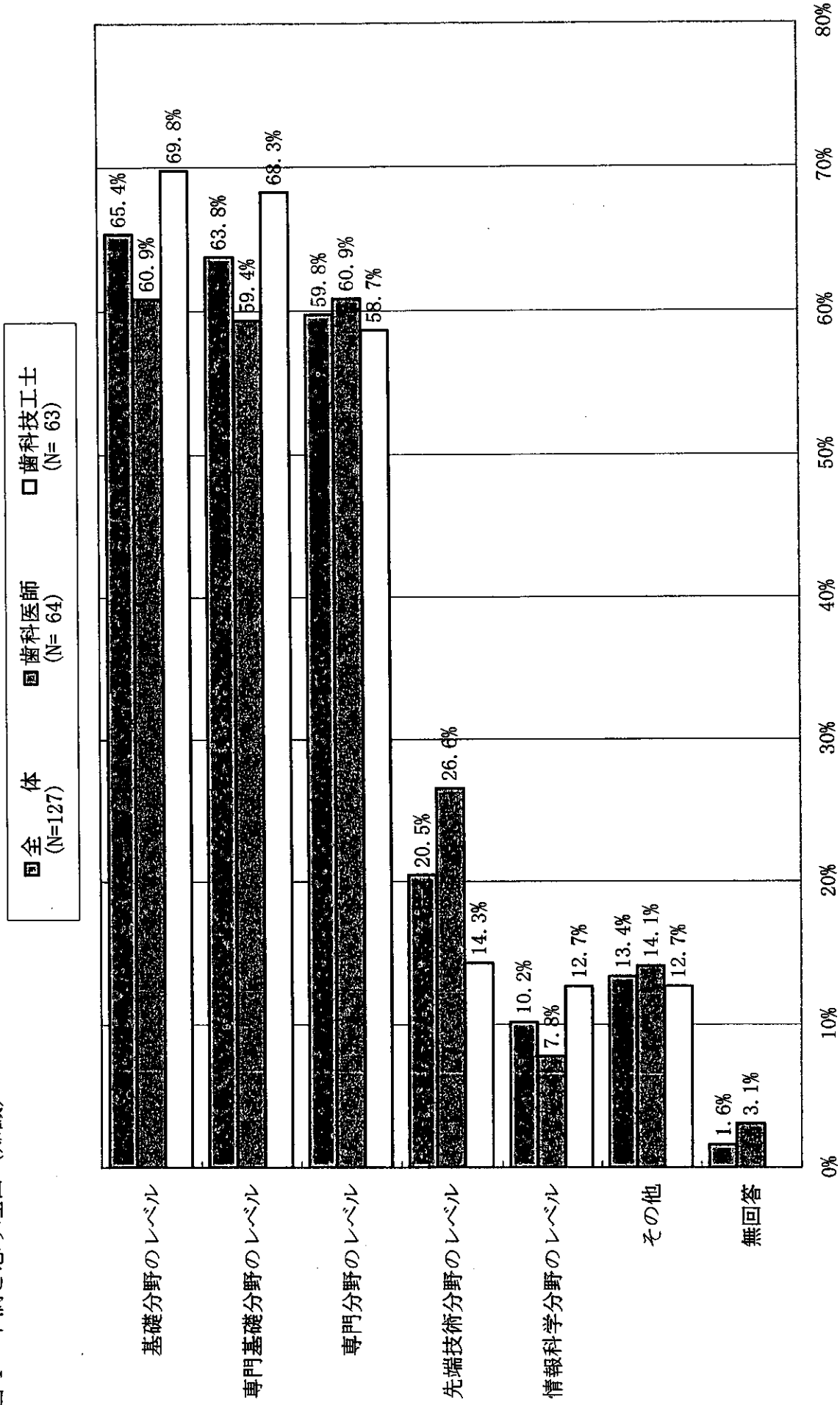


図5 不満と思う理由 (技術)

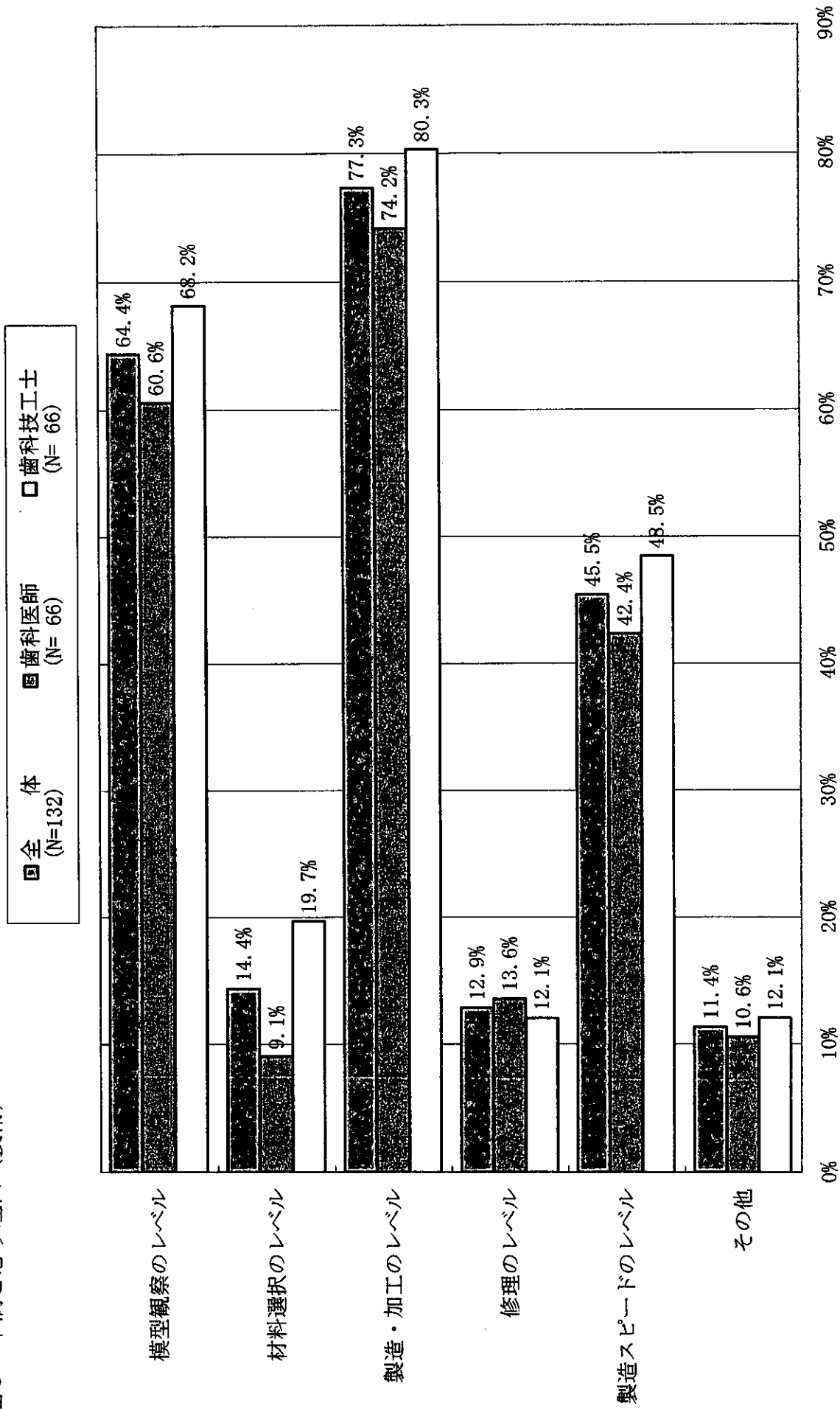


図6 不満と思う理由（社会性・人間性）

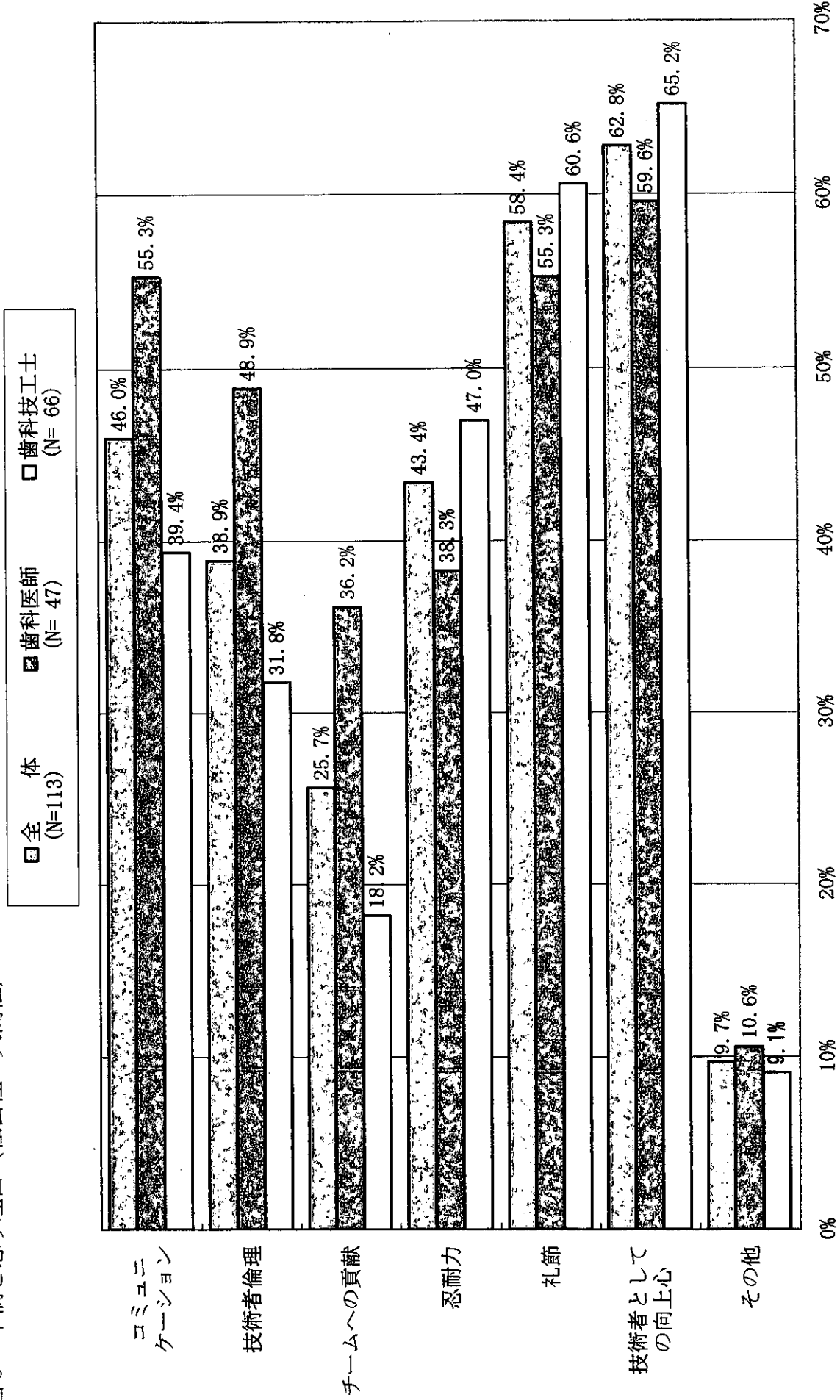
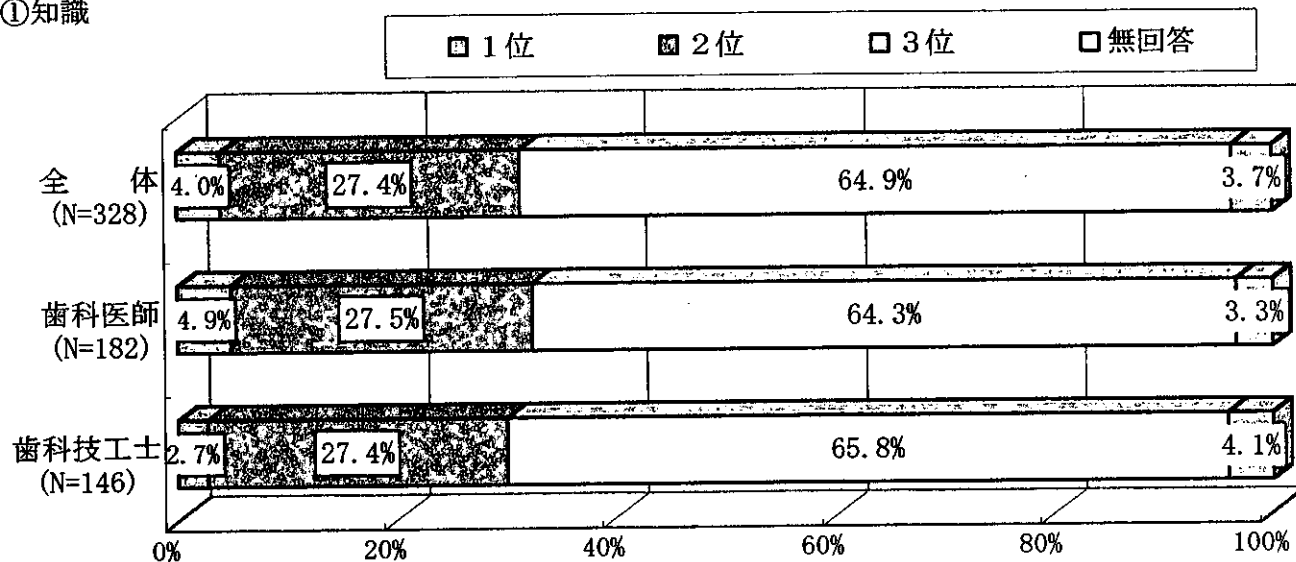
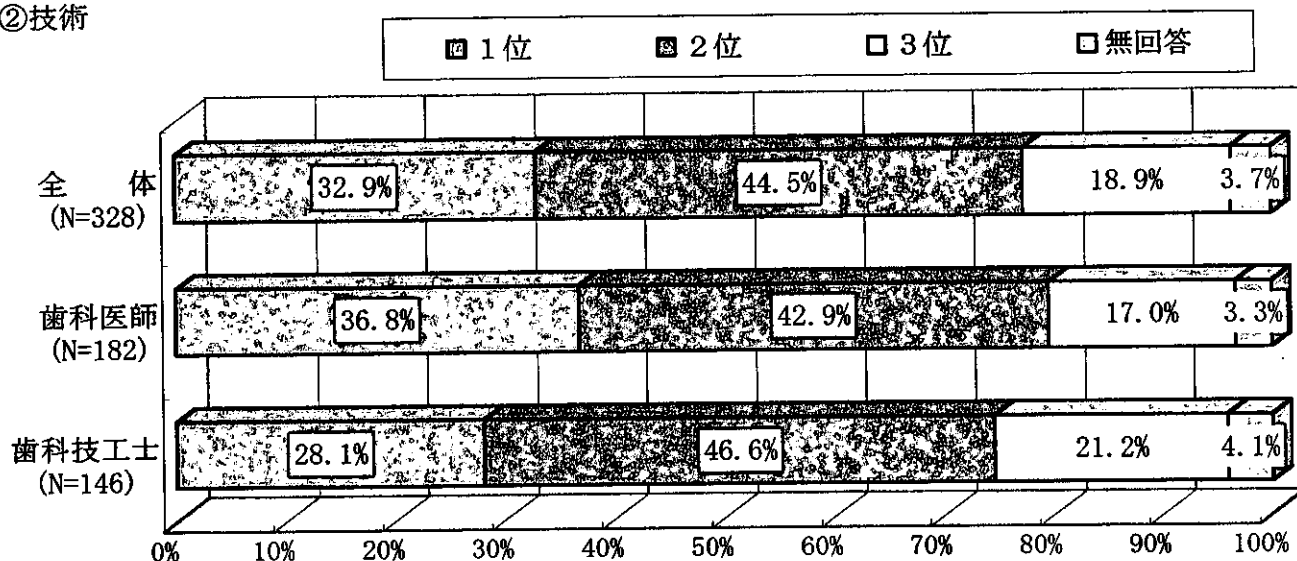


図7 新卒の歯科技工士を雇用するにあたり、最も重視するもの

①知識



②技術



③社会性・人間性

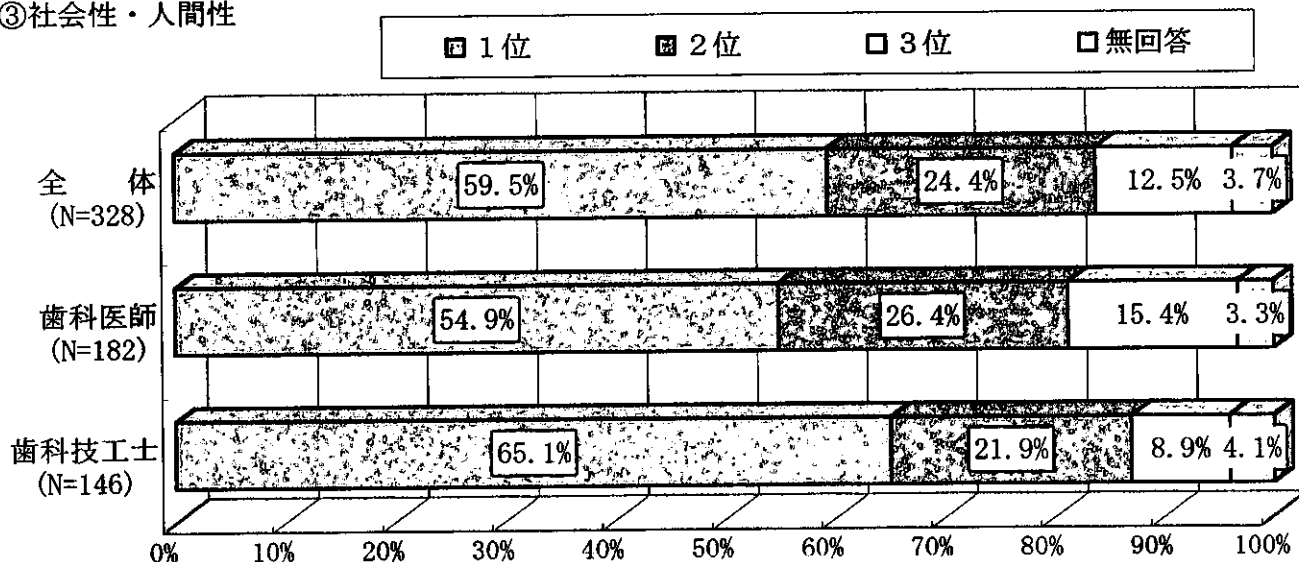


図8 新しく加えるべき新分野の内容

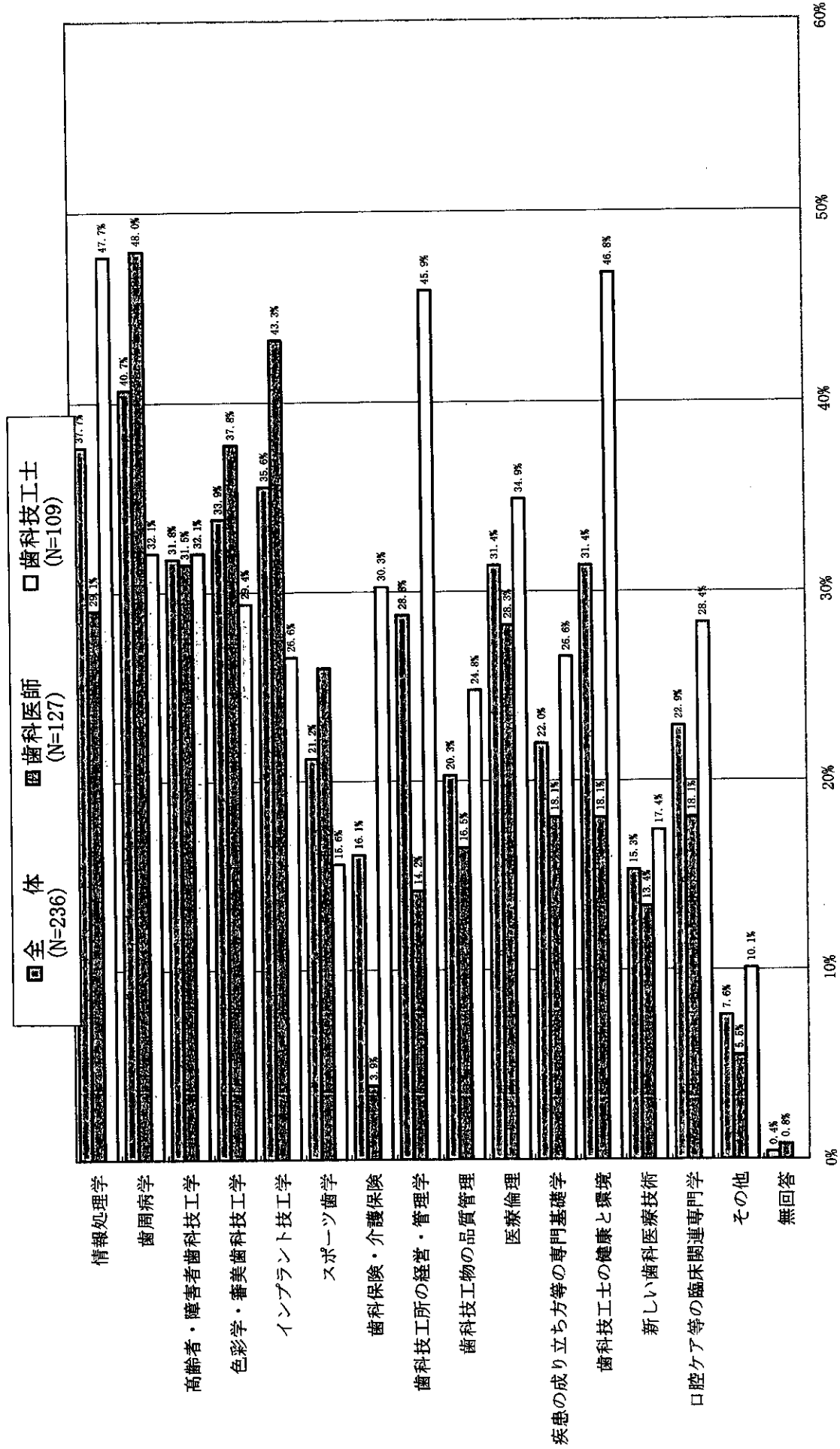


表1 歯科技工士養成所の教育内容 (3年制)

	単位数	学 科 目 (現 行)	新 学 科 目
基礎分野	8	外国語(英語) 造形美術概論	基礎自然科学 情報科学 倫理学
専門基礎分野	22	関係法規 歯科理工学 歯の解剖学 顎口腔機能学 歯科技工学概論	品質管理学 技工所の経営管理学 環境衛生学 歯科技工機器学
専門分野	63	有床義歯技工学 歯冠修復技工学 矯正歯科技工学 小児歯科技工学 歯科技工実習	歯科インプラント技工学 色彩・審美歯科技工学 特殊歯科技工学
合 計	93		

平成 12 年度厚生科学研究

(医療技術評価総合研究事業)

今後の歯科技工士に対する  
養成方策等に関する総合的研究  
分担研究報告書

・基礎教育的カリキュラムの検討

鳥山佳則 (東京医科歯科大学歯学部附属病院総合診断部)

・専門基礎教育的カリキュラムの検討

佐藤温重 (明倫短期大学)

・専門教育的カリキュラムの検討

末瀬一彦 (大阪歯科大学歯科技工士専門学校)

五十嵐孝義 (日本大学歯学部)

・歯科技工実習カリキュラムの検討

田上順次 (東京医科歯科大学歯学部)

2001 年 3 月

主任研究者

渡辺 嘉一

日本歯科大学



分担研究報告書

今後の歯科技工士の養成方策に関する研究  
—基礎教育的カリキュラムの検討—

分担研究者 鳥山佳則 東京医科歯科大学歯学部附属病院総合診断部

**研究要旨** 今後の歯科技工士養成における、基礎教育的カリキュラム改善の基礎資料として、主たる歯科技工士養成所における基礎的科目の授業時間数等を調査し、また歯科医師及び歯科技工士に対する意識調査を実施した。さらに医療関係職種養成施設の基礎系時間数及び学科目を調査した。

その結果、関係法規の時間数が指定規則上の時間数を大きく上回っていた。また、意識調査の結果では新卒の歯科医師に対する不満の理由として、基礎分野のレベルをあげたものが多かった。医療関係職種の養成での基礎系時間数を比較すると、歯科技工士養成での時間数が最も少なかった。

歯科技工士の養成においては専門知識や技術の習得と同等以上に、社会人としての教養や資質の向上が望まれていると思われる。

A 研究目的

歯科技工士の養成において、実施されている基礎教育的カリキュラム（基礎分野）の実態を明らかにし、歯科技工士の教育内容改善の基礎資料とする。

B 研究方法

以下の3つの視点から研究を行った。

1 主たる5校の時間数

全国の主たる歯科技工士学校養成所5校での基礎教育的カリキュラムの時間数を調査した。さらに、その内容についてのヒアリングを行った。

2 今後の歯科技工士養成に関する意識調査

全国の歯科医師および歯科技工士を対象として「今後の歯科技工士養成に関する意識調査」を行い、新卒の歯科技工士に対する満足度や、不満の場合はその理由を調査した。調査対象は、地区別無作為抽出により、全国の歯科医師415名、歯科技工士300名に調査票を発送した。回収率は歯科医師43.9%、歯科技工士48.7%であった。

3 医療関係職種養成施設の基礎系（基礎分野）の時間数及び学科目

歯科衛生士や理学療法士、作業療法士等、歯科技工士を含めた12の職種について健康政策六法を基に調査した。

## C 研究結果

### 1 主たる5校の時間数

英語の時間数については、指定規則30時間に対して、平均で32.2時間であった。

(表1)

授業の内容は、英会話や歯科英語等であった。

造形美術概論の時間数については、指定規則15時間に対して、平均で19.4時間であった。(表2)

授業の内容は、美術鑑賞や美術史等であった。

関係法規の時間数については、指定規則15時間に対して平均で24.4時間であった。(表3)

その他の時間数については、5校中4校が体育・保健体育を実施していた。(表4)

### 2 今後の歯科技工士養成に関する意識調査の結果

#### (1) 新卒者のレベルについて

現在の歯科技工士養成所新卒者のレベルについて、やや不満、不満と回答した者は、歯科医師35.1%、歯科技工士43.1%であった。(図1)

不満、やや不満と回答した理由について、基礎分野のレベルを理由としたものは(重複回答)、歯科医師60.9%、歯科技工士69.8%であった。専門基礎のレベルを理由としたものは歯科医師59.4%、歯科技工士68.3%、専門レベルとしたものは歯科医師60.9%、歯科技工士58.7%であった。(図2)

#### (2) 新しく加えるべき新分野の内容について(重複回答)

基礎分野に該当する新分野の内容は、情報処理学が歯科医師29.1%、歯科技工士47.7%、医療倫理が歯科医師28.3%、歯科技工士34.9%であった。

また、基礎分野と専門基礎分野の境界と考えられる内容では、歯科保険・介護保険が歯科医師3.9%、歯科技工士30.3%、歯科技工所の経営・管理学が歯科医師14.2%、歯科技工士45.9%、歯科技工物の品質管理が歯科医師16.5%、歯科技工士24.8%であった。また、歯科技工士の健康と環境が歯科医師18.1%、歯科技工士46.8%であった。

(図3)

### 3 医療系職種養成施設の基礎系時間数及び学科目

歯科技工士養成の基礎系時間数は60時間であり、総時間数の2.7%であった。歯科衛生士は180時間、9.2%であった。(表5)

他の医科系職種では、視能訓練士が705時間、33.1%と最も多く、次いで臨床工学技士420時間、14.0%であった。他の医科系職種は、300時間台であった。

## D 考察

### 1 主たる5校の時間数

基礎分野の英語、造形美術概論、関係法規の3科目について、指定規則の時間数と、実際に行われている時間数とを比較すると5校中4校が関係法規の時間数を上回っている。

具体的内容については、歯科技工士法をはじめとして、歯科医師法、歯科衛生士法、医療保険制度に関わる健康保険法や高齢者の保健医療福祉に関わる老人保健法や介護保険法等が、実施されていると考えられる。

少子高齢者社会の進展により社会保障制

度に対する関心が歯科技工教育においても、重要視されていると思われる。

## 2 今後の歯科技工士養成に関する意識調査

新卒歯科技工士のレベルが不満、やや不満と回答した理由について、歯科医師の回答では、基礎分野のレベルを理由と回答したものが、専門基礎分野、専門分野のレベルとおおむね同率であった。歯科技工士の回答では基礎分野のレベルを理由と回答したものが、専門基礎分野とほぼ同率であり、専門分野のレベルを理由と回答した者より10%以上、上回っている。

これは、新卒の歯科技工士に対して知識や技術の習得以上に、社会人としての教養や態度が求められていると思われる。

しかしながら、このことは新卒の「歯科技工士」に限定されたことでなく、新しく社会人になる者に共通の問題とも考えられ、歯科技工士教育の見直しにより改善が行えるかどうかは疑問がある。

## 3 他の医療系職種養成施設の基礎系時間数及び学科目

12の職種の中で、歯科技工士養成の基礎系時間数は、時間数、総時間数に対する比率とも最も少ない。

これは修業年限が2年であることを加味しても、明らかに少ない。

この理由については、他の職種がすべて対人業務であるのに対して、歯科技工士には対人業務がなく、教育の主体が歯科技工物作成の技術習得に充当されているという特徴がある。

歯科技工士の養成においても、自然科

学、人文科学、社会科学のいわゆる教養科目の時間増を図るべきとの意見がある。

しかしながら、限りある時間の中で、基礎分野の時間数を増加すれば、専門基礎分野や専門分野の時間数が減少することになり、技術教育の低下のおそれがある。

基礎分野と専門分野のバランスをどうするかは、今後の「歯科技工士像」そのものに関わる本質的な問題である。

## E 結論

- ・ 新卒の歯科技工士に対する不満の理由として多くの歯科医師、歯科技工士が基礎分野のレベルを理由としてあげている。
- ・ 医療系職種養成施設の基礎系時間数の調査結果では歯科技工士養成における基礎系時間数が最も少ない。
- ・ 新卒の歯科技工士に対して知識や技術の習得以上に、社会人としての教養や態度が求められていると思われる
- ・ 基礎科目の時間増は、専門科目の時間減につながるものであり、両者のバランスをどうするかは将来の歯科技工士像そのものに関わる問題である。

## F 研究発表

なし

## G 知的所有権の取得状況

なし

表1 英語の時間数

指定規則上 30時間

学校名	学則上	実施時間数		
		合計	講義	実習
A	30	31	31	0
B	30	30	30	0
C	30	40	40	0
D	30	30	30	0
E	30	30	30	0
5校の平均	30	32.2	32.2	0

表2 造形美術概論の時間数

指定規則上 15時間

学校名	学則上	実施時間数		
		合計	講義	実習
A	15	21	21	0
B	15	15	15	0
C	15	16	15	1
D	15	15	15	0
E	15	30	30	0
5校の平均	15	19.4	19.2	0

表3 その他の時間数

学校名	科目名	実施時間数		
		合計	講義	実習
A	体育	16	0	16
B	社会福祉	15	15	0
	歴史学	15	15	0
	化学	15	15	0
	物理学	15	15	0
	英語 I	15	15	0
	歯科口腔介護	15	15	0
	*B校はいずれも選択科目			
	C	保健体育	126	8
D	保健体育	30	4	26
E	口腔病理学	45	0	45